

## 平成25年度 第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会 議事録

日 時 平成26年2月28日(金) 18:30～20:45  
場 所 熊野市文化交流センター 多目的ルーム  
出席委員 大森 達也、寺本 幸治、野地本道也、尾崎しほ子、杉松 道之、  
田岡 隆、長村 徹夫、塩野 真、山本 浩司、田尾 友児、  
久保 治也、廣畑 勝也、辻本 誠一、長嶺 智士、岩本 拓志、  
土井 秀之、堀川 恭太、新谷 武文 (以上敬称略)  
(事務局) 教育改革推進監 加藤 幸弘、高校教育課長 倉田 裕司、  
教育総務課班長 辻 成尚、教育総務課主幹 久野 嘉也、  
教育総務課主査 宇陀 和彦、教育総務課主査 西 達夫

### 開 会

(事務局：西)

皆様方には、ご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。

ただ今から、平成25年度第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会を始めさせていただきます。

まず、お手元の配付資料を確認させていただきます。事項書が表紙となっております2カ所留めの資料冊子が1部でございます。よろしいでしょうか。

また、開催案内の文書でもお知らせいたしました。本協議会は公開で行っております。広い会場を使用しておりますので、ご発言等はすべてマイクを通していただきますよう、ご協力をお願いします。

なお、議事録作成のため協議を録音しておりますことをご了解いただきますようお願いいたします。

それでは、事項書に沿って進めさせていただきます。

開催にあたり、県教育委員会事務局教育改革推進監加藤幸弘からご挨拶申し上げます。

### 1 あいさつ

(事務局：加藤教育改革推進監)

失礼いたします。県教育委員会を代表して一言ご挨拶申し上げます。

前回は昨年7月に第1回でしたが、そのときには、この後、担当からも説明させていただきますが、この地域における高等学校教育を取り巻く状況について、資料等で確認をさせていただきながら、木本高校、紀南高校の2校を活性化していくことについてご協議いただいたと思っております。

また、子どもたちが減少していく、特に小学校3年生、4年生、こういった時期の今後の学校のあり方について、どう考えていくかといったことについてもご意見いただいたかと思っております。

その後ですが、木本・紀南両校においては、ここでいただきましたご意見も踏まえ、それぞれの学校の特色化・魅力化について、それぞれの学校内の組織で地域の

方にも入っていただきながら取組を進めてきたということです。

本日は8時半までという限られた時間ですけれども、木本・紀南両校が更にどう活性化していくか。また、次年度以降の取組及び協議の進め方等についてもご意見をいただければと思っておりますし、生徒にとってより魅力ある学習環境ということはもちろんですが、地域の中で両校がどういう役割を担っていく必要があるのか、あるいは、地域にどう貢献していく必要があるのかという視点からもご意見いただければありがたいと思っております。限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### (事務局：西)

現在、まだ3名の委員が到着されておられません。随時、到着していただくものと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それから、資料の2ページをご覧ください。名簿のところでは13番目の久保委員ですが、当初は同窓会の副会長ということでしたが、先般、会長にご就任されたということです。名簿の変更をしておりませんでしたので、修正をよろしくお願いいたします。

それでは、大森会長からご挨拶をいただき、その後の議事進行をよろしくお願いいたします。

#### (大森会長)

こんばんは。去年はかなり回数がございましたが、今回は7月にあってから久しぶりの2回目ということになります。7月以来、たびたび熊野にも来させてもらう機会がありましたが、熊野がとて近くなり、津市から2時間以内で来られるようになりました。2月の頭には、私も子どもたちと一緒にこの熊野の青少年自然の家に来ました。子どもたちも近かったと言っており、高速道路ができたことによって、ずいぶん変わってくるかなと思いつつ今日は来させていただきました。

今、2月ということで大学も高校も入試シーズンであります。先日も後期選抜のデータが新聞等に出ておりました。今後、変更があるかもしれませんが、前期選抜、後期選抜の状況を見ますと、今年度は両校とも定員を充足することが予想されるデータだと聞いております。

また、今回は、7月以来、時間が経っておりますので、前回の振り返りを行うとともに、前回に要望のありました小学校卒業時点での公立中学校、私立中学校等への進学状況等のデータについても、提示いただければということですので、小学校からのこの地域の活性化も踏まえて、今日は検討していきたいと思っております。

昨年以来、この話が續いているように、この活性化推進は、両校の担うべき役割を検討するのは当然ですが、このことによる熊野地域の活性化及び地域貢献といったことも、これまでも考えてきたように、今回も一緒に考えていただきますようお願いいたします。

そして、平成25年度の活性化推進協議会は2回でしたが、今年度の活性化にかかわるデータ等を見ながら、この地域の高校活性化を平成26年度以降どういうふうに考えていくのかということも、今日は少し検討させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。そうは言いましても、時間には限りがございますので、

で、おおむね午後8時30分という終了時刻を予定しております。それまで活発な議論をお願いします。

それでは、座って失礼いたしますが、事項書に沿って進める前に、2カ所、皆様に、確認をかねて読んでいただきたいところがございます。これは昨年度に何回も確認されているかも知れませんが、時間が経っておりますので、最初に19ページの3番、特に(2)と(3)を読んでいただいて、もう一度思い出していただきたいと思っております。

よろしいでしょうか。(2)と(3)に基づいて、今年度の協議会、1回目、2回目と進んでまいりました。特に(2)の③につきまして、今年から小学校のPTAの代表の方にも入っていただき、地域全体で子どものことを考えていくという姿勢の協議会とさせていただきます。

3ページ、後ほど、県教委事務局からも説明がありますが、その説明の前に一度、3ページの前回の主な意見の集約についても目を通していただけますでしょうか。

県教委事務局からもこの件について報告がありますので、よろしいでしょうか。事項書2の報告事項(1)第1回協議会の概要について、及び(2)紀南地域の高等学校を取り巻く状況について、一括して事務局から説明願います。

## 2 報告事項

(1) 第1回協議会の概要について【資料1】

(2) 紀南地域の高等学校を取り巻く状況について

ア 紀南地域の小学校卒業者の中学校への進学状況【資料2】

イ 東紀州地域の高等学校への進学希望状況(平成25年7月・12月調査)

【資料3】

(辻班長)

それでは、報告事項の(1)と(2)について、まとめて説明させていただきます。先ほどから3ページの資料1を見ていただいていると思っております。今、黙読していただきましたので、ここは簡単に説明させていただきます。

前回7月3日の協議会では、この地域を取り巻く状況について、統計的な資料をたくさん出ささせていただき、十分時間を取って説明しましたが、その後の意見交換の中でここにあるような意見が出されました。

資料1、主な意見の1番目としては、両校の取組を積極的に情報発信することが大切であるとか、両校の教員とも一所懸命取り組んでいるが、私立高校へ流れる生徒や保護者の意識まで変えることは難しいというご意見もありました。3番目として、教育内容が魅力的であり、生徒や教員が魅力的な姿であれば、流出、つまり地域外への進学は止められるのではないかという意見もありました。5番目ですが、統合時期の入学者にあたる現在の小学校3、4年生やその保護者に統合のビジョンを示していく必要がある。その議論を始めてもいい時期だという意見もありました。そして、最後のところですが、木本・紀南両高校の活性化の問題と、統合するならどのような高校にしていくかという問題を両輪として当協議会を進めていくべきで

はないか。主にこのようなご意見がありましたので、報告します。

次の資料2からは、この紀南地域の高等学校を取り巻く状況について、前回もたくさんの方の数字の資料を出しましたが、前回の協議会以降に調査した内容について2点ほど報告をしたいと思います。

まず、資料2は、この地域の小学校卒業生の中学校への進学状況です。教育総務課では毎年8月に小学校から中学校への進学状況の調査をしています。一番右側の欄、合計という欄が熊野市と御浜町と紀宝町を全部足したものです。平成23年3月、24年3月、25年3月という3年間分のデータがあります。一番上が小学校卒業生数で、その下が卒業生数のうち、この地域の中学校に進学した人数。当然地域に進学するので、かなり多くなりますが、95.0%、95.2%となっており、直近の今の中学1年生にあたる学年が93.3%。パーセントで見ると2%にも満たないですが、地元への進学が少しずつ減っていることが分かります。ということは、地元以外、つまり、この市町以外の中学校に進学しているということで、その数が一番の直近では25人。前年に比べると増えているのが分かります。どういうところに増えているかといいますと、一番下の内訳のところに書いてありますが、直近のところは、6、0、1、18という数字が並んでいます。公立や県外の国公立の部分は、おそらく一家転住によるものだと思いますが、一番下の18というのは、欄に書いてありますように県外の私立で、これがすべて近大附属新宮中学校です。前年度、前々年度と比べると、今の中1の学年は非常に多い。市町別で見ますと、熊野市も増えていますが、紀宝町で増えていることが見て取れるのではないかと思います。

次に資料3です。これは、この地域の進学希望状況です。県教育委員会では毎年7月と12月に中学校の卒業予定者、つまり中学3年生に対して進路希望状況調査を行っています。ここで見ていただくのは、真ん中の小計の欄が、熊野市、御浜町、紀宝町、紀南地域の小計になります。それぞれ7月、12月と並んでいます。7月から12月にかけて木本高校への進学希望者が20人ぐらい減って、紀南高校への進学希望者が20人ぐらい増えているのを見ていただけるかと思います。市町別に見ますと、横に熊野市、御浜町、紀宝町と並んでいます。御浜町のところはあまり変動がありませんが、熊野市、紀宝町で今言ったところのデータが動いているかと思います。

もう一度、真ん中の網掛けのところへ戻っていただいて、横の県内というところで真ん中に管内私立高校とあります。県内にある私立高校への進学希望も7月から12月で4人から9人と5人増えているということと、県外という欄があると思いますが、7月は35人で、12月は32人となります。この32人が県外希望ということですが、この希望調査では、具体的な学校名は特に調査はしていません。おそらくは例年の傾向からいくと、近大附属新宮高校への希望者が多くを占めているのだと思いますが、具体的な校名は調査していませんので分かりません。ただ、この32という数字は、昨年が41、その前が33、その前が37で、ここ数年に比べると少なくなっています。それをパーセントで示したものが次のページです。同じように見ていただくと、小計欄の12月のところで東紀州地域の県立高校希望

が84.5%とあります。これはこの地域の木本高校、紀南高校への12月現在の希望が84.5%、尾鷲高校は0です。ここ数年を見ますと、80.1%、81.8%、79.2%というように、過去3年間は80%前後でしたが少し高くなっています。その反対に県外が8.4%となっていますが、ここは過去3年を見ると、11.2%、8.7%、9.3%ですので、過去3年間よりも低くなっているということが、今回の傾向、今の中学3年生の傾向として見ることができます。

過去3年間の数字は、資料としては前回も説明しましたが、12ページ以降に詳しく載せています。今日は参考資料ですので詳しく説明しませんが、またご覧ください。

以上、前回の協議会以降で統計的に分析した追加資料として報告しました。

**(大森会長)**

それでは、先ほどの説明に対しての質問、あるいは、新たな情報等の付け加え等がございましたらお願いします。

いかがでしょうか。

塩野委員、前回この質問をいただきましたが、このデータで納得していただいたでしょうか。

**(塩野委員)**

言ったデータを出していただきよく分かりました。しかも紀宝町が増えて、流出していたので、肩身が狭いような思いもしますが、大変参考になりました。ありがとうございます。

**(大森会長)**

その他何かご意見、ご質問等ございますか。

**(長村委員)**

紀宝町から県外への流出の件ですが、ある学校は県外の和歌山県立新宮高校を受検できるシステムを昔から採っておりまして、その中で流れていくので多いのではないかと考えています。本年度も半分近くがそちらを受検することになっているとのことです。

### 3 協議事項

#### (1) 木本高等学校・紀南高等学校の活性化に係る取組について【資料4、5】

**(大森会長)**

それでは、事項書の3の協議事項に入りたいと思います。はじめに(1)の木本高等学校・紀南高等学校の活性化に係る取組について、委員である両校の校長先生からお話をいただきたいのですが、本日は1校あたり10分程度でお願いします。

なお、皆様からのご意見・ご質問については、両校の説明後にまとめてお受けしたいと思いますので、よろしくをお願いします。

**(土井委員)**

木本高校から先に説明させていただきます。時間が10分ということですので、要点を絞って説明させていただきます。

まず、大きな1番の「今年度の主な取組」は、(1)～(5)にあるこのような柱を立てておりました。これが年度末を迎えてどうであったのかということ、大きな2番「25年度の取組の成果と課題」という形でまとめております。

まず、(1)番の部分が一番大きな内容ではないかと受け止めております。新しい教育内容を、この26年度の新入生から作っていかうということで、これまで温めて内部で議論してきたことを、いよいよ中学生、保護者、中学校に発信しまして、そして、その中身についてご理解をいただいていたところです。2学科で3つの教育内容、特に普通科については、文理コースと文系コースという2つのコースを設けることで、より進路希望に密着した形での、とりわけ国公立、難関私立大学をめざす生徒に対しては、その勝負となる1年生の後半の部分もきちんと視野に入れながら指導していきたいということでセッティングいたしました。

セッティングしただけではなかなか集まってもらえないので、この点では中学校の先生方に全面的に協力いただきました。また、いろんな細かいところに至るまでのご意見も、中学校の校長先生や進路担当者にいただきまして、何しろ初めてやることですので、試行錯誤しながら計画を作っていく、そして周知に努めました。

結果として、本当に中学校の全面的な協力をいただき、しっかりと周知できたのではないかと今となっては受けとめております。新たな教育内容の展開についてのプランを示したことで、志望状況につながっていると考えているところです。

この結果、今度の後期選抜では、普通科でプラス13名という志望をいただいております。木本高校全体としてもプラス7名の志望に至っている大きな要因であると受けとめております。

しかし、これはまだやっていない、プランだけ示した中身に対しての期待値で志望が集まっておりますので、この先、26年度に向けての話は後にありますが、もちろんプランを微修正しながら、現実に対応して適切に学力を高めていき、生徒の希望を叶えていくためにも、本校の勝負の年に26年度はなるだろうと受けとめております。

もう一つ、進学指導への信頼という点については、この新プランで用意しております学力向上委員会を先取りして実施することで、特に難関校への進学に対して一定の成果を得られていると内部では受けとめております。特に今度卒業する3年生は、1年生のときから模擬テストにおいてはあまりいい成績を出せていない実態がありました。それが夏休み明けまで続いていたのですが、冬休み前の土壇場によりやく上向きの傾向が現れ、センター試験の自己採点の結果では大きく成績を伸ばして、指導の成果が上がったと受けとめております。本番の合否は今からですが、既に一般入試の私立におきましては、関関同立という関西の有名な難関校にのべ10名の合格者を出しています。これは、この十数年来なかったことかと思えます。また、関東方面では、一般入試で早稲田に1名、指定校で1名の合格も既にいただいております。

ここまでの進学の実績としては、特に看護系専門学校と看護の四年制大学にも多数、予想以上に合格できております。ここまではまずまず順調に推移していると受けとめております。

さて、(2)のところです。学校全体の指導としては、教職員全体がベクトルを合わせて取り組むことが大事だと焦点を定めました。そこで、みんなで一緒にやる部分を3つ作ろうではないかということで、規範意識、学力向上、進路保障に絞りました。規範意識の点で、登校指導についてはみんなでローテーションを組んできちんとやろうということと、ここには書いておりませんがピアス指導も徹底してやろう、頭髪指導も再登校も含めて徹底してやろうと。ここでは担任と生徒指導部の協力関係をきちっと作っていこうという目標を立ててやっていたところ、当初、目標とした、クラスが落ち着いているという生徒の評価が昨年よりも上がっておりますし、校則を守っているという評価も若干ながら上がっております。

また、学力向上については、授業を大事にする姿勢を示すために、チャイムからチャイムへということで授業をきちっとつくっていこうと。特に教師がチャイムどおりに教室にいるのはたやすくできることですが、生徒の側の意識がそろわないとチャイムと同時に授業は始まらず、ぐだぐだした時間が生まれることとなります。これについても、まだ生徒の100%とはいかないですが、昨年に比べれば大きく改善できていて、更に今後も続けていきたいと思っております。

そして、進路指導では面接指導に既に全員で取り組むという伝統がきちっとあったところですが、それも更に改善を加えて徹底してやっていったところ、就職の実績、あるいは指定校や一般推薦での成果も上がっております。

8ページに入ります。(3)「地域に誇りを持ち社会に役立つ」、これは教育目標に掲げているところですが、この点ではユネスコスクールの取組によるところを具体的な手段として持っております。ただ、30年来にわたって今まで取り組んできた浜掃除等、いろいろやってきたことは相変わらずきちっとやっていく。それに大きく付け加えることはあまりないですが、今年度に関しては、防災プロジェクトの中身をPTAの協力を得まして紀南地域のPTA全体で取り組むということや、あるいは、松本峠でのガイド活動を発信できたということがございました。

地域との連携という点では、サポート委員会の委員を増員したこと、東紀州くろしお学園との連携が大きく進み、特に人権教育に関して大きな成果を得たと受けとめております。

また、定時制では連携併修を活用した3年間での卒業生を明日出すところでもあります。ただ、2年生以下になりますと、まだまだ現実感が乏しいのか、連携併修に途中で挫折する生徒もおりますので、保護者との連携などによりもっとしっかりやっていきたいと考えているところです。

最後に、平成26年度に向けては、先ほど申し上げましたとおり、いよいよ描いたプランを実行していく年であります。3年間を見通したきめ細かな進路指導を、特に新1年生については、普通科の文理コース、文系コースのみならず、総合学科におきましても、進路をしっかりと見据えたキャリア教育に重点を置き、初めてインターンシップを導入することも計画しておりますので、これを順調にやっていきたいと思っております。

今、学校は大変落ち着いております。生徒指導事案の件数といい、その中身といい、昨年と比較すると全く別の学校に今なっております。しかし、それだから楽に

なつたと顔を見合わせるのではなく、生徒指導に大きな労力を割かれなくて済む分、今こそ、授業力の向上に力を注ぐ絶好のチャンスなのではないかと。既に今年度から、例えば人権の推進協議会に中学校の先生方やPTAの方にも入っていただいて、一緒に授業を回すこともやらせていただいたり、その中で高校では気づかない視点というのをいろいろいただいたりしております。自分たちだけの授業研究会は既に国語、英語では定期的に行っておりますが、今一つ、これが他の教科にまだ広がっていないという部分や、あるいは、自校の教員だけではなく、他校あるいは他の部署の人々の目線を入れるという形で授業をブラッシュアップしていきたいと思っております。なお、外へ行く研修の機会も、お金もかかることですが、予備校の講義も含めていろいろ行かせたいと思っておる次第です。

以上、木本高校からでした。

#### (大森会長)

ありがとうございました。それでは、紀南高校から説明をお願いします。

#### (堀川委員)

本校の活性化に係る取組について、本年度を振り返って、そして次年度に向けてということでお話をさせていただきます。具体的な取組計画については、前回の協議会で提示させていただきましたので、その中での特に強調したいこと、それから、新たな取組などを中心に話をさせていただきます。

活性化に係る取組というのは、本校の場合ですとコミュニティ・スクールとして教育内容の充実をいかに図るかということに言い替えることができるかと思えます。具体的には3つの柱があるということで、これまでの取組を生かしながら、新たな気づきなどをもとにして改善に努めてまいりました。

3つの柱の1つ目が、「コミュニティ・スクールの理念を生かした地域とのコラボレーション」です。特に本校の教育資源、具体的には教員の専門スキルや施設設備の開放を通じてということです。今年度、新たな取組としましては、本校ワープロ部員と顧問の教員によるパソコン教室、年賀状作成教室を、この2学期の終わりに実施させていただきました。それから、オールウェザートラック、全天候型のトラックですが、これも陸上競技の講習会等で、活用しながら講習会をさせていただきました。このオールウェザートラックについては、東紀州随一の設備であるとともに、同窓会の支援も受けながら誕生しました。また、学校外諸活動へも生徒がいろいろな形で出向かせていただいておりますが、今年度の新たな取組として吹奏楽部の訪問演奏をあげることができます。具体的には近隣の介護老人保健施設などに行かせていただきました。情報発信では、学校ホームページ、これは昨年度よりも更にリアルタイムに発信することができたと思っております。そして、コミュニティ通信「紀南の風」です。年3回発行しておりますが、今年度2回目の発行から新たに熊野市、南牟婁郡、紀南地域の小学校に配布させていただくようになりました。

2つ目の柱の「キャリア教育の充実と進路実現」という部分ですが、新たな取組としまして1年生の学年団と進路指導部が連携を図りながら、特に就職対策を見据え、一般常識テストを踏まえた、そして、事後指導も加えた取組も始めさせていただきました。それから、3年生については面接練習、2年生にも3学期に実施をし



ておりますが、これに力を入れました。

3つ目の柱ですが、「基本的な生活習慣の確立」と「安心・安全な学校づくり」についてです。花いっぱい運動、プランターで花を栽培する取組ですが、3年前の水害で一時中断しておりましたが、今年度復活いたしました。生徒の豊かな情操の育成にかなり効果があると見ております。チューリップの芽が、新しい1年生を迎える頃に花開くことを今、楽しみにしております。それから、部活動加入の奨励ということで1年生を中心に学年で取り組んできました。これは時間の有効活用を図ったり、自らの秘めた可能性へのチャレンジであったりということもねらいであると考えております。全体で目標が60%でしたが、現在57%で、もう少しというところです。ただし、1年生については、現在65%の加入率です。今後は、学校全体でのサポート体制の必要性を痛感しております。つまり、部顧問だけに任せるのではなくということです。防災体制の構築ということでは、3年前の水害を教訓にした、また、いつ来るか分からないという大地震、大津波を視野に入れた防災マニュアルの改訂や、学校防災アドバイザーの方においでいただいて、助言を受けながら避難所の再検討、確認を行いました。それから、巨大地震発生を想定したということで、より現実的な避難訓練を来月実施の予定です。

これらが今年度の主な取組です。

次のページのそれを振り返ってということですが、まず、1つ目の地域とのコラボレーションですが、ここのねらいは3つあるかと思えます。1つは、地域の認知を深めていただくということ。2つは、地域貢献。3つは、生徒に教育効果がいかにもたらされるかということです。特に外部の方が教育ボランティアとか聴講生で入っていただくということで、生徒に緊張感がもたらされるという部分で教育効果が上がっているということです。

それから、先ほどの本校の施設設備の開放等々ですが、やはり専門的スキルを持つ教員が、地域の方々とかかわることによって、連携に弾みをつけるきっかけとなる絶好のチャンスであるということで、今後、より一層の機会を設けていきたいと思っております。また、パソコン講座等々については、生徒がアシスタントとして参加したことが振り返ってみて良かったなど。生徒にとっても大きな自信になったことと思えます。

それから、部活動加入の生徒や生徒会役員を中心に学校外の諸活動、例えば交通安全運動の出動式とかに多くの生徒が参加するようになりました。この暮れの出動式には交通安全運動も100名を超える生徒が参加したということで、活動に裾野の広がりが見られるようになったということ。また、こういうことをマスコミ等で取り上げていただいたり、表彰されたりすることによって、生徒に自信と誇りが芽生え、奉仕精神や自己有用感の醸成へと結びついております。本校の実態を踏まえたときには、非常に大きなことだと感じております。

そして、先ほど申し上げましたようにホームページをリアルタイムで更新しておりますので、本校の様子はその都度、手に取るようにお分かりいただけるような状況です。ただし、聴講生や教育ボランティアの方々の掘り起こしにはなかなかつながらないという面もありますので、また別の形での情報発信、広報も必要かと思っ

ています。口コミによる宣伝とか、実際にボランティア、あるいは聴講生として参加いただいた実体験をお持ちの方に誘いをかけてもらうことも必要かと考えております。

キャリア教育の充実と進路実現ですが、本校では1年間を通じた長期インターンシップを十数年にわたって続けておりますが、実効性をいかに高めるか。単に経験しましたにとどまるのではなく、成果や課題の考察もより深めながら、就労体験のみにとどまらないような学習活動に発展させていく必要があるのかなと思います。

就職については、本校は6割前後の就職希望が毎年ありますが、今年度、厳しい状況ながらも内定率100%を達成することができました。非常に大きかったと思っております。年内に100%達成いたしました。これには進路指導部と学年との連携でありますとか、ジョブサポーターということで県のほうからも加配をいただいていたたり、教育就職相談支援員も配置いただいたりということで、体制整備と内外との連携が功を奏しているのかと思います。

今後の課題としては、進路実現を図るにはやはり学力が必要です。特に本校では義務教育レベルも含めた基礎的・基本的な学力の定着、言い替えたなら「学び直し」のための学習が必要です。ですので、平成27年度入学生から、そのための教科・科目を学校独自で新たに設けて、時間割に乗せていくということで具体的な取組を進めております。

安心・安全な学校づくりですが、本校も学校としては今、総じて4月から非常に落ち着いております。具体的には、基本的な生活習慣の部分で、例えば遅刻の件数ですが、2学期を終えた時点で、前年度に比べて34%ほど減っております。服装・頭髪違反もほとんどなくなっております。何もないというわけではないですが、非常に職員の機動的できめ細やかで粘り強い指導の積み重ねが功を奏しているのかと思います。朝の挨拶運動も生徒会の役員が交代で出て、全職員もローテーションということで毎日続けております。また、花いっぱい運動ということなど、生徒が前面に立つ日々の地道な活動、地道な営みが学校の健全さにつながっておるということです。一方で、内面に課題を抱える生徒が増える傾向にあり、実態が多様化しており、この部分が問題行動や学校不適應の大きな要因となることもありますので、教育相談体制の更なる充実が必要であると。これは大きな今後の学校の経営課題の一つになり得ると捉えております。

次年度に向けてですが、当地域の生徒数の減少が加速し、一層厳しい局面が待ち構えております。ですので、コミュニティ・スクールとして学校運営協議会に3つの部会がありますが、そこでの議論を更に深めていくということ。活動の具体化についても、更にいろいろな議論の質を高めていくことも必要であろうかと思っております。基礎的・基本的な学力の定着についても、当地域では御浜町と連携し、「小中高キャリア教育合同実践事業」という取組をやっておりますので、こういった場なども利用して小中高12年間のスパンで生きる力をどう育てていくかということについても、ぜひとも次年度、議論を深めるような場が持てればと考えております。

最後ですが、コミュニティ・スクールについては、今年で7年目に入っておりますが、あくまでもツールでありますので、これから幅広い視点から今後に向けて議

論の質をより高めていくことも必要であると考えております。

以上です。

**(大森会長)**

ありがとうございました。それでは、両校から説明いただきましたので、両校の活性化推進に向けた取組について質問、ご意見等をいただきたいと思いますのですが、いかがでしょうか。

皆様が考えていらっしゃる間に私から質問させていただきます。土井委員、センター試験の今年の受験者の学力が3年生の冬休み前に大幅に上昇したということですが、新聞記事等の情報によると、今年のセンター試験はちょっと難しかった。特に国語は50万人の受験生がいる中で誰も満点がいなくて、最高点は195点だったという状況ですが、点数としては昨年比で大体どれくらい上がっていたか分かりますか。

**(土井委員)**

正確な数字は把握しておりませんが、昨年と比較しますと実は平均値が下がっております。昨年は極めて最初から学力の高い学年でありまして、国公立の合格者を27名出した学年ですので、センターの数値は明らかに高いです。

**(大森会長)**

ただ、全国の平均点が下がっている中で、自己採点の結果と全国の平均点との乖離が小さかったという判断ですか。だから、学力が上がったと。

**(土井委員)**

そうですね。夏休み明けの段階では、とても2桁の国公立合格者数は無理かと覚悟しておったところ、これは2桁いけるのではないのかと今は思える点数が並んだということです。

**(大森会長)**

分かりました。ありがとうございました。

あと、堀川委員にも、教育ボランティアが足りないことですが、コミュニティ・スクールの場合、高校は紀南高校だけですが、三重県内の小中学校を見せてもらうと教育ボランティアの方は年齢不問なので、80何歳の方が家庭科の教育ボランティアで入られているところもあります。例えば、この地域では小学校、中学校を退職された先生方がたくさんおられると思いますが、紀南高校では教育ボランティアの方が、どれぐらいいらっしゃって、どういう現状なのか、どこに工夫が必要なのか教えていただきたいのですが。コミュニティ・スクールとしては、この教育ボランティアが旨味の一つというか、子どもたちに生きる力を育む上において非常に大きいと思いますが、いかがでしょうか。

**(堀川委員)**

実は、今年度は1名だけです。この1名の方は中学校の退職教員です。本校では、先ほど申しあげましたように学び直しの教科・科目を時間割に乗せていたりとか、あるいは、朝のホームルームなどを利用したりして、更に活動を幅広く展開していきたいと思っています。そういうところに教育ボランティアの方にぜひ来ていただけるよう、ホームページやコミュニティ通信「紀南の風」とかを活用する形でいる

いろと働きかけをしています。町の広報の利用にしても、これだけでは「待ち」の態勢だとも言えると思うので。

先月、県内の小中のコミュニティ・スクールの会合に参加をさせていただいたときにも、やはりホームページなどでの募集ではなかなか人が集まらないと言われていました。やっぱりそうなのかと思いました。だから、今までと違った形で直接的な働きかけをしていかなければならない、これを貪欲にといいましょうか、積極的に手分けをしてというような形でと考えております。

**(大森会長)**

コミュニティ・スクールというのは、地域の方が学校へ入ってくることで相乗効果が生まれますので、教育ボランティアが1名というのは、コミュニティ・スクールとしてはちょっと厳しいところです。例えば部活動や教科指導もそうですが、いろんなところで教育ボランティアの方は入れると思いますし、教育ボランティアの方が今度は講師になって夏休みの子どもと保護者向けの講座をやっている学校もあります。そうすると、この教育ボランティアの方を10名ぐらいはなんとか確保していただければと思います。三重県内のコミュニティ・スクールを見ても、非常に教育ボランティアが少ないというのは、私としては気になるところです。

何かご意見、ご質問等ございましたら、委員の皆様からよろしくお願いします。

長嶺委員どうですか。中学校の先生から見られて今年度の取組は、昨年の話と比べて、かなり変わったと私は感じているのですが、いかがでしょうか。

**(長嶺委員)**

両校共、生徒指導に力を入れていただいていることも聞かせてもらいましたし、地域で見させてもらっても、今までの状況よりも良くなってきているのかなと思います。やはり落ち着いて勉強できる環境が一番大事だと思います。そうであってもはだめですが、教員が生徒指導に力を注いでいるときは、勉強に力を注ごうとしても注ぎきれない部分が出てくると思います。そういう中で悪循環が繰り返されることがよく起こりますが、そういう部分も改善されてくれば、非常に良い方向に進むのかなと思います。今、良い方向に進んできているかと思います。それが進路状況にも見えてきているかと思います。

**(大森会長)**

ありがとうございます。辻本委員、校長会として今年はサポートをされているようですが、いかがでしょうか。

**(辻本委員)**

両校の活性化という部分でいえば、今年は非常に大きな成果があったと思います。端的にそれを表しているのは、管外へ流出する生徒の数が随分減ったということです。ここにはたくさんの立場の方がおみえですので、中学校の教員の立場から言えば、先ほど土井委員と堀川委員がおっしゃっていただいたように、中高の連携がすごく進んだ年であったと思います。例えば、紀南高校であれば、オールウェザーのトラックのお話がありましたが、陸上部の先生が、例えば中学校の陸上競技大会に審判として参加いただく中で交流が生まれ、県大会へ出場する本校の生徒や他校の生徒が紀南高校の陸上部顧問の先生に指導を仰ぎに行くとか、そういう形で直接的

に高校の先生、あるいは高校生と中学生、中学校の先生と交流できました。

そんな中で子どもたちの意見を聞いていたら、ある子は違う高校の野球部に入りたいと考えていたけれども、実際にそういう経験をさせていただく中で、紀南高校に入って陸上部で頑張りたいと話すようになりました。これは一つの例ですが、そういう動きが出てきたというのは、一つの大きな成果かなと思います。

もう一つは、木本高校についても、やはり今年、随分高校の教育制度の内容自体が変わって、それに対する期待感はすごくあります。それを我々が保護者や子どもにきちんと伝えられたのは、やはり高校の先生方、特に校長先生と中学校長会であったり、進路担当者会議であったりとかで十分な交流ができて、忌憚のない意見を交わすことができたからだと思います。そういう形の成果がこの数字に表れてきているのかと思います。ですから、今年のこの実績は、ぜひ来年度も両校の活性化という点で続けていけたらいいのではないかと感じています。

#### (寺本委員)

皆様が言ってもらっていますように、本当に今年度、活性化が見えてきて、とても良い傾向かと思っています。木本高校の普通科については、何年もマイナスの状況だったのが、今年度はプラスということもありますし、また、紀南高校についても、コミュニティ・スクールやインターンシップに取り組んでいただき、また就職の数も上げていただきました。私たちの身近にも卒業生が活躍している状況もありますので、ぜひとも2校共この活性化を維持して頑張ってくださいたいと思っています。

#### (塩野委員)

今までの意見と重なるところもありますが、木本高校は学力に徹した取組をしていただいて、センター試験でも今のところ、良い成績を修めていただいていると。進学に特化したということが評価されて、志望する率も上がったのではないかと思います。紀南高校は、大変厳しい中、就職内定100%で、素晴らしい数字だと思います。それぞれの特色を生かしたところが全面的に、頑張っているというだけでなく、それが本当に伝わっていているかと感じました。うちは小学生の保護者なので、なかなかピンと来ないところもありますが、今年の志願者数を見た感じでは、地元の高校がそんなに魅力があるのなら地元に行こうかと思った方が結構おられたのではないかと私は思っています。

#### (大森会長)

では、現役の保護者として山本委員、どうですか。今の木本高校、今年1年で去年と比べて。

#### (山本委員)

私も普通科が3クラスになるということで、定員をずっと心配していましたが、定員を上回る志願者が来てくれております。

この間、管理職を抜いた教職員とPTAとの話し合いがありましたが、その中で話をしていると、土井校長がしっかりと教職員にも話していることがどんどん伝わってきました。自分たちもやらないかん、もう決まったことは仕方がないですが、それをやらないかんという教職員の気持ちが話をしている中で伝わってきました。

僕もPTA会長として2年目を迎えました、それがはじめは本当に心配でした。でも、教職員が校長先生と一緒にやっていると実感できて、PとTの間で本当に良い話し合いになりました。

**(田尾委員)**

紀南高校の保護者としてですが、本当に今年度は早くから就職率100%を達成していただけてありがたいと思っています。先生方がすごく頑張ってくれたのを身近に見ながら、やはりその成果が出ることで先生方も勇気づけられたのではないかと考えています。

先ほど発表の中で教育ボランティアが1人しかいないのでさみしいと言われましたが、本当にそこら辺は僕らもさみしく思っています。以前、福岡で開催されたコミュニティ・スクールの全国大会に土井校長と一緒にいったときですが、その発表の中で小中学校の退職された先生が、地元で長い間世話になった恩返しをする場所がほしいということで、そういう場所があれば声をかけていただければと参加しやすいと言われたのをよく覚えています。そういった意味では教育長や教職員組合に退職教員の方に声を掛けていただくよう、協力していただけたら一番ありがたいかと思っています。

それと、木本高校さんがすごく頑張っておられるということでうれしく思っています。ただ、今年の場合、昨年度より管内の卒業者が多く、どうしてもあふれることがありましたので比較は難しいと思うのですが、来年度はどうしてもこの管内で定員割れしていくと思います。今回見たときに、尾鷲市や紀北町のほうから志望する子が大変少ないということです、東紀州で取り合いしても仕方ないかもわかりませんが、ぜひとも向こうからも引っ張ってこられるぐらい魅力を出していただけたらありがたいと思っています。

**(久保委員)**

私からは3点ほど伺いさせていただきます。先ほどの生徒指導への取組の報告もありましたが、2つの高校でのいじめ対策の部分はどうなっているかということと、自主退学も含めて退学者の状況はどうかということ、急な話で分かりにくいかもしれませんが、分かる範囲でお願いしたいと思います。もう一つは、木本高校5学級、紀南高校3学級ということで、部活動についても勉強と共に非常に大事だと思いますが、学級数が減っている中で、部活動をしていくにあたって、現状、どういう問題があるかについて、分かる範囲でお話いただきたいと思っています。

**(大森会長)**

いじめの問題と退学者の状況と部活動における問題点の3点について、よろしくお願ひします。

**(土井委員)**

いじめの問題は、昨年からの県の指導によりまして、まずはアンケート調査という形で定例の調査が定期的にあります。所定の様式もあります。それで何らかの記載があった場合には、今度は面談調査という形を取ることにしております。昨年度はそれで面談調査までいった例が1件ありましたが、面談調査をした結果、注意深く見守っていればそれでいいかという判断をさせてもらったところです。年齢がいく

につれてちょっと大人になってきたのか、指導もちゃんと受け入れられる、話がよく分かるということもあって、昨年のうちに解決していったとなっております。

今年度は、その調査において記載されたものは出てきておりません。しかし、安心ばかりしておれないのは、ご存じのとおり、いじめはいじめられている本人もなかなか言えない、書けない実態もあるということ踏まえ、今のところ、担任は昨年度よりもより生徒と密着していろいろな面談を多く重ねるとともに、保健部なり生徒指導部なりが担任の後ろからいろいろなバックアップする体制が昨年度以上にとれており、生徒一人ひとりをきちっと見ることができているという思いもあります。しかし、油断はせずに見守っていきたいと思っております。

退学に関しては、今年度は一度退学して、別の学校でやり直すという生徒はおります。休学届けになった生徒もおります。今年度の場合、数はそれぐらいです。昨年はもっとおりました。

部活動に関する問題は、本当に頭を痛めているところです。学級数が6学級から5学級に減ったため、3年間にわたって1学級ずつ減り続けていきます。しかも、普通科を増やして総合学科を減らしたので、法的な教員定数の絡みからいうと、総合学科のほうがざっと1.5倍ぐらいの教員定数をもらえるところを、総合学科を減らして普通科を増やしたので、今年度は昨年よりもマイナス4名、来年度も更にマイナス4名、最終的には合計で11名減ることになると教職員課から聞いています。11名ということは、大体2人で部活動を持っていますから、5つのクラブが消えてもらわねばならないという無体な話になります。

そこで、昨年度から今年度に向けて、生徒会及び部活動顧問会議では、部活動休部規定・廃部規定を既に見直しました。ちょっとでも活動が止まったり、あるいは登録部員がいなかったりという瞬間がちょっとでもあれば、たちまち休部・廃部という形で消していこうと。とはいうものの、まだ現実的にはそれに該当するところがないということで、部活動顧問のやり繰りは大変厳しいところがございます。学級数が減っていくと、生徒が何をやりたい、あれをやりたいという希望を満足させる部活動を提供することができない。そうすると、そのことが原因で生徒の志望が鈍っていつてしまう。そして学級数が減り、更に教員定数が減っていくという悪循環に陥っていく気配があることを痛感している次第です。

#### (堀川委員)

紀南高校では、いじめについては今年度認知しているというケースはございません。県の指示もあってということで、今、土井委員が言われましたが、アンケート調査を学期に1回程度実施しており、そこでは上がってきていません。アンケート調査でそのような訴えがないから安心していいのかというと、そうではなく、いじめが深く静かに潜行していないかということを常に意識する必要があると思います。また、日常的に学校内にいじめは絶対にあってはいけない、許されないという雰囲気、それから、ちょっとしたことでも教員に安心して相談しやすい関係づくりを日常的にいかに構築するかということが大事だと思います。ですので、思い過ごしかも知れないけれども、ひょっとしていじめと関係があるのではないかという出来事についても生徒から聴き取りを行う、あるいは、教育相談等を含めて保健室にお

世話になる等、人間関係の悩み等々も含めて、生徒の異変やサインを見落とさないよう小さなことでも、担任、保健部、生徒指導部などかかわりのあるところが連携を図ることに努めております。これについては、本当に深く静かに潜行していないかアンテナを高く張り巡らすことが大事だと思います。

退学については、今年度は数名おります。これは問題行動等での退学ではなく、学校を続けていくことに疑問を感じているいわゆる不適応、あるいは自分のあり方について考え直したいという進路変更、それから、抱えているメンタル的な疾病治療への専念といったことでの退学者は数名生じております。

部活動については、生徒や保護者が実際に高校を選ぶときの大きな要素の一つであると思います。うちも生徒数も減っております。学級数、教員の数も減っておりますが、その中で特にバスケットボールやバレーボールといった団体種目については、ぎりぎりの人数、試合にはなんとか出られるだけの最低限の人数はいますが、余裕を持ってとかレギュラー争い、ポジション争いで切磋琢磨するという部分では、絶対数が不足している部分もあります。ですので、今後、バリエーションの部分と、どこかで活動状況等を見ながら部活動の整理の部分、この二者反するようないろいろな部分での検討、選択をしなければならない場面もあるかと考えております。

#### (大森会長)

廣畑委員、同窓会としていかがでしょう。

#### (廣畑委員)

今、皆様が質問されたようないじめであったり、教育内容であったり、教育ボランティアの人数はどうのという議論は、学校運営協議会において年間を通じて絶えず議論しております。校長先生からも説明がありましたが、先生方も学校管理者もいるところで絶えず話をし、その内容をPTAも地域の人間も同窓会も把握をしております。

私たちは、大森会長が指摘されたように足りない部分もたくさんあります。一昨日、第6回の学校運営協議会がありました。そこでは、田岡教育長からのご指摘もあり、また私たちもずっと考えておったこととして、今後この地域の高等学校の形がどうなるにせよ、この学校運営協議会をもっと発展させていくべきだろう、動きを変えていくべきだろう、今まで以上に頑張っていくときであると話し合いました。今までと形を変えていくべきときに差しかかったということ、今、感じながら聞いておりました。

#### (大森会長)

地域代表者として、野地本委員、尾崎委員いかがでしょうか。

#### (野地本委員)

今、いろいろお聞かせいただいて、活性化に向けて先生方、一所懸命取り組んで来られて、こんなに早くおっしゃったような結果が出てきたことはすばらしいことだと思います。また、これが来年にもつながって、どんどん進めていっていただければと思います。

私、学校の部活動をすごく奨励しています。部活動を通じて、上下関係や横の関係の中でのコミュニケーションがいっぱい取れます。また、部活動をすることで精



神的にも集中力がついて、勉学のほうでもそれが生きてくると思います。それから、外部の人とのかかわりも非常に大事なことだと思います。紀南高校では外部からいろいろな方を招いて指導してもらうこともできると、先ほど大森会長がおっしゃいましたが、これもいろんな幅の広い考え方、やり方があると思いますので、できるだけ多く集めて、生徒にいろいろなことを知らせてやっていただきたいと思います。

それと、学校外活動にしてもそうですし、自分たちで何かをやることを決めさせてやらせる。それを先生方が口出しするのではなく、悪いほうへそれていかないか見守る形で、生徒たちに自主的に取り組んでいくような考え方を持たせることがとても大事ではないかと思います。自分たちがやりたいと思ったら、周りにいる先生とするべき人たちからいろいろなことを学んで、今後の就職や進学という進路にその考えを持っていていただきたいと思います。これからの木本高校、紀南高校、先生方の頑張りにすごく期待しています。

#### (尾崎委員)

今、野地本さんが言われたことを少し具体化したようなことになりますが、両校ともにキャリア教育をされていて、その中で面接指導というのも必ずあるかと思えます。私自身、いろいろ面接をさせていただきますが、きちんとノックをして入室する、元気な声で挨拶して席に着く、そして貴社の将来性にひかれましたという決まりきった言葉をそつなくこなすような形にこだわった面接指導ではなく、言葉は下手でもいいので、自分の言葉で自分の気持ちをちゃんと話せるような、分からないことは、「すみません、勉強不足で分かりません」とか、分からないことも取り繕って答えようとするような、その本人の言葉なり人柄が出るような指導もお願いしたいと思います。

職業観についても、例えば、消防士になりたいとか先生になりたいという職業の名前で決めるのではなく、どういった仕事をしたいのか、例えば人の役に立つ仕事がしたいとか、先生になったらこういう形で人の役に立ちたいとか、そういう職業観を勉強するようなことができればいいかと思えます。

先生方は生徒の就職が決まってほっとされると思いますので、そこまでお願いするのもちょっとどうかと思いますが、就職した生徒たちが、例えば3ヵ月後、1年後どうなっているか追跡していくと、次の指導につながると思えます。実は就職して1ヵ月以内に辞めているとか、あんなに苦労して面接練習をしてせっかく受かったのに、ちょっとのことで辞めているとか、1年経っても辞めようかどうしようか思っているとか、あるいは、あまり希望のところではないが、やってみてこういう面ですごくやりがいを感じているとか、そういうところを次の生徒たちにもつなげるようなことができればいいかとも感じています。

そして、今後のこの地域の高校のあり方の中で、学び直しの場合ということの重要性といいますか、木本高校には定時制がありますし、紀南高校も教育ボランティアも活用しながら学び直しに取り組んでいるとのお話でしたが、そういう形の学校づくりは欠かすことができないと私は感じています。勉強したいと思ってもなかなかそういう環境に恵まれなかった人たちもいます。人や環境との出会いによって、そこから学び直して人生がどんどん変わっていくことも、実際にたくさんあると思

ますので、今後の学校づくりにぜひそういう観点も欠かさずに入れていただきたいと思います。

**(大森会長)**

岩本委員、先生が預かっている子どもたちは、早くて3年後かもしれませんが、小学校の先生という立場から見て、2人の校長先生のお話をどのように感じられましたか。

**(岩本委員)**

ちょうど一番少なくなる小学校3年生の担任を今、持たせてもらっています。中高の連携について伺いたいと思っています。小学校では、保育所・幼稚園・中学校との連携を大事にしながら学校体制をつくっています。繰り返しになってしまうかもしれないですが、高校における中学校との連携は、できるだけ日常的なほうがいなど自分は思っていますが、そういう中学校との日常的な連携の必要性であるとか、先ほど辻本委員も言われましたが、それ以外のところで具体的に中学校とどういう連携をされているのかという部分、また、そこから見えてくる高校に対する子どもたちや中学校現場からのいろんなニーズを、今後、どういう形で活性化や特色化の中に取り入れていこうとされているのかというところを、ここにも書かれている部分もありますが、教えていただけたらと思います。

**(堀川委員)**

中学校との連携ですが、ここで今、紹介させていただいたキャリア教育の部分、これは小学校さんにも入っていただいています。あと、生徒指導の部分で連絡協議会的な場もつくっていただいています。うちは小中高で合同のボランティア活動を年に1回、阿田和の学校近辺、七里御浜の清掃活動等々をやらせていただいております。それらが主な取組です。

特にこの地域は、紀南高校もそうですが、地元の生徒がほとんどです。ですから、地元の生徒を高校に入ってから見るということではなく、小学校、中学校ではどうだったのかというように、一人ひとりの生徒のキャリアステージといまじょうか、幅広く長い目で見るという視点で教育活動を展開していくことが大事だと思います。それは、学力の面でもそうですし、生徒指導の面でも、単なる問題行動ではなく、生活背景や家庭環境はどうだったのかという部分に起因するケースが多いので、定期的な連絡協議会だけではなく、いつでも必要なときに出向かせていただく、あるいは情報をいろいろと提供していただくということについては、今、非常にスムーズにしていると思います。学校が落ち着いている部分についても、中学校とのやり取り、合格が決まってからの4月早々だけではなく、何かがあったとき、何かが起こりそうなきには、すぐに中学校に飛んで行かせていただくことがスムーズにできる状況にありますので、それらが大きいと思います。

**(土井委員)**

日常的な中高の連携という点では、でき上がってきた部分と、まだまだの部分があると私は思っています。でき上がってきた部分では、本校に関して言えば、中学校の生徒指導連絡協議会に生徒指導部長が定期的に行かせていただき、意見交換するようになったことが新たなところですが、また、昨年度から人権の推進協議会には、

地元の有馬中学校、木本中学校の人権教育担当者に入ってもらい、一緒に考えていただくようになりました。そのような動きの中から、今度は中学校と小学校が連携しているところを、ぜひ高校の先生方、特に学年の人権教育担当にも見に来ていただき、いろいろと一緒に取り組んでいきましょうという動きも新たに出てきております。

ところが、意外と十分でない、課題になっているのが学力面での連携ではないかと思っています。木本中学校や矢渕中学校等、中学校からはいろいろな授業参観のご案内をいただきます。できるだけ私も行かせていただき、現場の教員も行ける範囲で行っております。しかし、高校の授業参観には、なかなか来ていただけません。中学校の先生が保護者であれば来ていただくこともありますが、参観に来る時間が取れないというようなこともあるかと思えます。

その結果、学力観をそろえたり、あるいは、学力向上のための方法をいろいろ討議したりという形で、お互いに同じ方向を向いて切磋琢磨していくところがまだまだだと思います。結構、これは重大な問題ではないかと私自身は受けとめております。今年の入学者選抜においては、昨年までなら県外へ出ていた生徒を10名ほど、木本高校を第一志望という形でこちらを向かせることができ、県外への進学希望者を約20名程度まで減らせたとは思いますが、先ほどの資料2にあったように、18名が小学校から中学校への進学段階で県外に出ていっています。紀南高校と木本高校を存続させるためには、中学校進学時であれ高校進学時であれ、外へ出ていっている生徒を減らすため、公立校が責任を持って「公立で大丈夫ですよ」という形で小中高が共に頑張らないと、両校は維持できないと思います。流出という点では同じことですから。私たち2校の取組もまだまだです。特に木本高校は絵に描いた餅を示しただけの話ですから、本当の勝負は来年度からです。しかし、学力向上という点では、中学校も共に地域の信頼を得ていかないと、高校だけが頑張ってもだめ、中学校だけ頑張ってもだめだと思います。この協議会は高校の活性化推進協議会ですが、その部分は同じテーマとして捉え、来年度ぐらいから何らかの具体的な策へ向けてお互い知恵を絞りながら、踏み込む時期ではないかと深刻に考えております。

#### (大森会長)

教育委員会のお立場から杉松委員、ご感想かご意見をいただきたいのですが。

#### (杉松委員)

数字から平成30年前後の統合やむなしという、背水の陣といいますか、木本高校と紀南高校においては、本当に特色がある学校経営をいろいろ工夫され、それぞれかなり成果をあげられている点については、高く評価したいと思います。

私、たまたま木本高校の同窓会の役員をしており、学校関係者評価委員という立場で学校におじゃますることが何回かあります。紀南高校とは接点がありませんが。木本高校で行われた学校関係者評価委員の会議での報告の中に、一つの大きな目標として、学校を良くするには「時を守り、場を清め、礼を正す」というものがありました。その具体的な方法として、先ほど紹介のあったチャイムが鳴ったらすぐに授業を始めるということを打ち出されています。前回、授業参観に行きましたとこ

ろ、既に鳴る前から先生は、授業は始めないですが、きちっと机の前に立って、生徒たちが整然と座るのを待って、それから授業を始めているというのを目にしまして、学校の先生方もよく頑張っていたらという感心したところです。

できれば、子どもの流出を防げて、両校がずっと存続していければと思います。そのための努力をそれぞれの高校、小・中学校が、学力の向上も含めて頑張っていたらという感想を持ちました。

#### (田岡委員)

先ほど木本高校の土井委員から「学力の向上」を小中高の連携のテーマとしてはどうかという話があったと思いますが、まさに私もそういうのを感じています。一昨日、紀南高校の学校運営協議会がありまして、学校から来年度の教育課程の提案がありました。その中で、先ほど堀川委員から「学び直す」というような言葉があったかと思います。具体的に言えば、小学校、中学校で定着できていないところを高等学校でもう一度やっていただくというような内容、そういう講座を作るということでした。教材も資料として付けていただいていたのですが、その中の数学のところでは、小学校何年生かの教材になるのかと思いますが、小数と小数の足し算の問題の例が載っていました。それを見たときに、小学校、中学校で確かな学力をつけていかなければならないと改めて痛感したところです。そういう意味で言えば、両高校の活性化は、小学校、中学校にも大きな責任があるかと思っています。

#### (長村委員)

私の母校である木本高校、また、長男の母校であります紀南高校の取組等に大変感心させていただきました。その中に生徒指導がきちっとできたから学力の向上につながっていったというお話がありました。

少し話はずれますが、この間、三重県の「美し国駅伝」がありまして、私どももちろん参加していますが、遠いので必ず前泊するわけです。年齢的には小中学生から大人までいますが、小中学生の世話はうちの職員が総出でやりました。そうしましたら、小学生の子どもが家に帰った後、「職員が非常に丁寧に優しく対応してくれ、世話をしてくれた。自分も大きくなったら役場の職員になりたい」と保護者に言ったらいいです。私は、まさにこれを学校でやるべきではないかと思いました。校長会でも紹介しましたが、学校の授業の中でしっかりとそれをやる必要があるのではないかと。そうすると、子どもが授業に参加する中で、学ぶことが楽しいと分かれば、先ほど話にありましたいじめとか不登校というものがぐっと減るのではないかと。したがって、生徒指導に駆け回ることも少なくなるであろうと。あくまでも学校というのは授業が主体でなければならぬし、授業が中心であると私は常々思っております。

そういう中で、両高校の活性化は、小学校と中学校のつながりの中でも考えていかなければならない。その中心となるのは授業であろうと。だから、その授業について小中高の三者が、今後ますます話し合う、協議する、研究し合うことによって、小中高の連携した活性が真に生まれてくるのではないかと。

そして、もう一つ、どうしても僕たちが忘れてはいけないのは、児童生徒が、高等学校を含めて、学校で勉強するのが楽しいという気になったら、必ずそれを家庭

で話すと思います。あるいは、高学年、高等学校になったら「今日は授業が楽しかった」とか言わないかもわかりませんが、その子どもの態度で分かってくると思います。学校の授業が活性化すると、それが家庭へ伝わるので、その相乗関係がますます生まれてくるのではないかと。そういうのが本当の活性化を進めていく中で大事ではないかと私は今、確認させてもらいました。

**(大森会長)**

最後に高等学校現場の先生を代表して、新谷委員お願いします。

**(新谷委員)**

3点だけ私の思ったことを話させていただきます。

1つ目ですが、先ほど小学校の岩本委員から小中高の連携についての話がありました。小中高がどういう形で学習や生活、あるいは今も少し問題になった発達障がいの問題で連携していくかについて、今、御浜町教育委員会が窓口になっていただいて、阿田和小学校、阿田和中学校、紀南高校の3校からそれぞれの委員が集まり、キャリア教育推進という形で協議を行っています。その中で見えてきたものは、小中高の連携の機会がなかなかないことです。特に高校と中学校の連携もなかなか難しい。それと、小学校と中学校についても、授業の中での連携は難しいという話も聞きました。では、授業の見合いをしようということで今、実践が始まったところですが、2年間やりましたが、来年もそういう形で御浜町教育委員会が窓口になって、小中高の連携の実践がこれから更に進んでいくと期待しています。今のところ、私たち委員しか授業の見合いはしていませんが、小学校の教員が中学校、高校へ、また、我々が小学校へ出向くという形で授業を参観させていただいている。先日も高校の教員が小学校1年生に授業で算数を教えたらどうなるかといった話題も出ています。これからどんどん連携を深めていけるのではないかと期待しています。

次に、2つ目ですが、学び直しという話が出ました。これは、今の1年生の中で高校の授業になかなかついていけない生徒がいるので、もう一度基礎学力の部分から見直してみようということで、担任の先生たちが中心になって実践をやってきました。しかし、それではどうしても先生の負担が大きかったので、学校のカリキュラムの中に取り込んで、学び直しの授業、基礎学力の回復授業という形の選択教科として置こうという実践です。高校へ入ってまた小数点の足し算かと言われるかもしれませんが、小・中学校の問題・責任にするのではなく、高校の中でそれをきちんとやることによって、高校を卒業する最低限の学力を身につけさせる、あるいは「数I」の内容が分かるような形で授業を進めていけることを目指す実践です。

最後、3つ目ですが、紀南高校には、廣畑委員や田尾委員、田岡委員にも入っていただいています学校運営協議会があります。先ほども教育ボランティアの話がありました。確かに教育ボランティアを呼び込んで学校の中を活性化することも大事ですが、それプラス地域の人たちの声が生に学校に響く、そういうコミュニティ・スクールを今、紀南高校は実践しているところです。

先ほど、木本高校のPTA会長でもある山本委員からPとTの話し合いの紹介があったと思いますが、これは私が木本高校にいるときに始めた実践ですが、管理職

を抜いてもっと本音の話をPとTがしようということで取り組んできました。この前、県の教育長が紀南高校の学校運営協議会の視察に来ていただくことがありましたが、その中で学校運営協議会委員の方がおっしゃった言葉に「やっぱり緊張感が要るよね」というものがありました。先生たちが緊張感を持って地域の声を聞き、あるいはその地域の人たちに応える。PとTの会も同じで、やはり先生たちが緊張感を持ってPからの言葉を聞く、そういう場面が増えてこないと活性化は進んでいけないのではないかと考えています。その効果が今日の委員の方々からのご意見の中に出ていたと私自身も思います。その成果が、少しではありますが今回の志願者数の増加という形になったと思います。

さて、大切なのはこれからだと思います。先日の紀南高校学校運営協議会の中で御浜町の教育長でもある田岡委員がうまくおっしゃってくれました。ミクロではなく、マクロでこの地域の教育を考えなければいけないと。2校存続を考えることもあっていいけれども、1校にならざるを得ないときに、自分たちがどんなビジョンを持てるのか、そこまでの議論をこれから研究・協議していかなければならないという話になってきました。おそらくこの活性化推進協議会は、そのきっかけとなるものとして県教委が設置していただいたものと思います。次は、地域が真剣に動かなければいけない時期に来ていると私は思います。委員の中には、小中の先生方、あるいはPの方がみえますので、私たち高校も一緒になって、県立高校が子どもたちのためにこういう学校であってほしい、あらなければならない、そんな議論がここから始まるのだと思います。もちろん今もう始まっていますが。県の教育長が、2つの学校が頑張ってくれたらそれでいいのだと言われました。しかし、現実的にはその先のことも見つめながら、地域の声が起こってくるような発信をこの活性化推進協議会の委員の方がしていただけたらと思っています。私も含めてです。

#### (大森会長)

ありがとうございました。新谷委員にうまくまとめていただいたので、次の事項に入りやすくなりました。では、(2)平成26年度の紀南地域高等学校活性化推進協議会についての協議に入ります。まず、事務局から説明等がありましたら、よろしくをお願いします。

#### (2) 平成26年度の紀南地域高等学校活性化推進協議会について

##### (事務局：加藤教育改革推進監)

特に資料などはありません。紀南地域の協議会と同じようなこういった協議会を、紀南地域のほかに伊勢志摩地域、伊賀地域でやらせていただいております。これは県立高等学校活性化計画に基づき、今後の少子化の進行等で高等学校のあり方に課題がある地域について、県が設置をさせていただいているものです。ご発言の中にもありましたが、来年度、この熊野市、南牟婁郡の地域で、中学校卒業生数がおそらく40名ぐらい減になると見込まれております。その後、3年ほどは微増・微減が続きますが、また、平成31年、32年と2年連続でおそらく40名ほどの減がやってくると予測されています。もちろんあくまでも予測であり、今後の社会増

減・自然増減等がありますが。そのようなことも踏まえ、県教育委員会としては、引き続き、今後の中長期的なこの地域の県立高校のあり方について、こういった場で様々な角度からご協議いただけないかと思っておりますので、その進め方等について本日ご意見があれば、もちろん来年度の1回目に確認しながら進めていきますが、お願いできればと思います。よろしく申し上げます。

**(大森会長)**

それでは、この件についてのご意見を申し上げます。

**(長嶺委員)**

今年、定員オーバーということで、木本高校でプラス7、実質6だと思っておりますが、紀南高校で4ということで、この地域の高校へ行けない生徒がこの管内で10人出ます。これは中学校の教員として、保護者と子どもを目の前にして進路指導の経験のある方なら大変なことだと思っております。この地域で高校へ行けない子どもが10人出てしまうということは、この子どもたちはどこへ行くのだろうか、実際、中学校卒業後に家を継ぐと言っている子どももいます。

去年、募集定員を減らすことによって地域外へ出ていくことへの拍車がかかると言わせてもらったことがありました。今回も今の段階で、定員よりも10人オーバーしているということで、他地域の高校へ行きたいと思っている生徒がいても止めないと思います。中学校としては、出ていってもらったほうが、あふれる子が少なくなるという現実があるからです。そういうところを考えていくと、今年の志願者数が増えたのは、高校が頑張ってくれたというのもあると思いますが、本当に判断しないといけないのは、中学校卒業生数が減る来年、どれだけこの地域の高校へ引っ張れるか、入れられるかによってだと思っております。中学校もそのあたりは頑張っていかなければならないところだと思っておりますし、募集定員よりもマイナスとなる状況があるのであれば、自分たちとしても地域の高校への進学を進めていきたいと思っておりますが、進路決定は、本人と保護者が最終的に決定するものですので、無理矢理という訳にはいきません。だけど、今、両校が頑張ってくれているので、そういう方向性でこちらも働きかけることは十分できると思っております。

来年度にどういう進路希望が出てくるか、最初のあたりでは分かりませんが、中学校も頑張らないといけないと思っておりますし、高校も頑張ってください、連携も取りながら、この地域の高校がどういう方向に進んでいったらいいのかということも含めて考えていかなければと思います。そういうところも来年度、この活性化のあたりで考えていってほしいと思っております。

**(大森会長)**

事務局、長嶺委員のご意見に対して何かありますか。

**(事務局：加藤教育改革推進監)**

来年度、非常に大きな課題があるということで捉えていただいていると思っております。まさにそういったいろんな観点が必要ということで、来年度の協議の進め方についてご意見をいただければと思います。それを踏まえさせていただき、来年度の1回目の協議の進め方について、会長とも相談させていただきながらご提案させていただこうと思っております。

#### (廣畑委員)

年に何回という数字は申し上げませんが、当然この協議会はできるだけ続けてほしいと思います。

もう1点は、この協議会だけでなく、もう少し中学生、小学生の保護者に近いところで、県の方々や大森会長が同席していない自分たちで話し合う場、情報を共有する場を作り、地域の子どもたちのことをどう考えるのか話し合うべきだと思います。何かを決定する場ではなく、それぞれに意見があると思うので、そういう意見を出し合いながら話し合っ、それぞれの保護者なり地域の人たち一人ひとりが考えをまとめていけるような場を作っていくべきだろうと思います。このことに関わり、紀南高校の学校運営協議会の中でも話をしましたが、私たちの学校運営協議会の中からそれを社会に向かって呼びかけていくことは、規則により設置されている学校運営協議会の役割としてはいかなものか、コミットしにくいということですので、ぜひ現小学生、中学生の保護者の団体であるところから、「そういう話し合いの場所をつくりましょうよ」、「情報をもっと分かりやすく出せる場を作りましょうよ」といった声をあげ、場を作っていただきたいというのが私の希望です。

#### (大森会長)

先ほど土井委員から、私立に流れることをとめるには公立が頑張らなければいけないという話がありました。津市では一昨年、津高校がある小学校の保護者向けに説明会を開きました。賛否両論あったようで今年はありませんでしたが。私も一人の子どもの保護者として、また他の保護者の皆さんも説明会は良かったと思っていましたし、逆に、なぜなくなったのだろうと。その結果、その小学校では、今年私立中学に多数流れているという情報があるぐらいです。会長というより保護者として言わせてもらおうと、例えば小学校での参観日の後とかに、高校の先生による説明会をする、私たちの学校はこんな学校ですと説明してもらったほうが保護者としていいと思います。

話を戻しますが、今日の資料の3ページに前回の主な意見としても書いてありますし、今日もいろいろいただいたご意見の中で、平成30年、31年の中学校卒業生数減の問題があるということで、将来的なことを考えていくべきだというご意見をいただいています。合わせて、長嶺委員や廣畑委員も言われましたが、今の木本高校と紀南高校の活性化は、絶対これからも考えていかなければならないことであるし、特に来年は勝負の年だということでした。

皆様のご意見をお聞きして、今の取組を進めている現状の木本高校、紀南高校のことについても考えなければいけないし、平成31年、32年のことも考えていかななくてはならないと、私は感じています。つまり、2つのことを考えていかななくてはならなくなっているというのが、今年度の2回の協議会での皆様のご意見ではと私は感じっていますが、その辺についてはいかがでしょうか。

#### (塩野委員)

まさに、自分の子どもが平成31年に中学校を卒業するので、その辺に関しては不安を持っているところです。平成31年卒業見込みが295名、今年の卒業生は381名、その中で、紀南高校、木本高校に進学する生徒は322名、ざっくり考



えて50名から60名は違う進路に進んでいるという現状があります。それがそのまま平成31年にも同様かという、そうではないとは思いますが、例えば、そうなった場合に、295名から50名、60名が出ていったとしたら、230名とかという人数で2校が存続になるかどうかという問題で、本当に不安なところでもあります。ですが、今、紀南高校、木本高校、それぞれ進学や就職に一所懸命取り組んでいただいていますし、例えば国公立・難関私大に進学できる学力をずっと維持してもらえればと思います。この間、先生との話し合いの中で指定校推薦もたくさんあるので、今、大学へ行くのはそんなに難しくないという話をいただきました。しかし、例えば2校が1校の新しい高校になっても、進路先が保障されるのかどうか、就職先が保障されるのかという不安はもちろんあります。でも、そういう不安を抱えていても、子どもたちには高校へ入学するために、小学校、中学校でしっかり勉強しなければいけない状況には変わりはないですが、その辺の不安などを、新谷委員のご意見にもありましたが、吸い上げていくのが私たち紀南PTA連合会の一つの役割でもあるかと思っています。また、廣畑委員の話にもありましたように、小学生の保護者にどんどん情報提供をしていき、保護者の意見をどんどん吸い上げ、それをまたこの協議会の場でお示しできるような活動ができたらと思っています。それをまさに今年からやっていかななくてはいけないと私はと思っています。このことについても持ち帰って、それぞれ話をしたいと考えています。

それと、もう1点、土井委員からありました小中高の連携における共通のテーマについてです。今、学力の話がありましたが、もし小学生にできることといえば、5分でも10分でも家庭学習を定着させるような保護者の役割があるのかなと思います。と、同時に私、県教育委員会のネット啓発リーダーというのをさせてもらって、小学校や中学校で携帯電話の危険性の話を保護者や子どもたちにさせてもらっています。この携帯電話の使い方や危険性というのは、多分共通の課題だと思います。中学校とか小学校でどんどん話をしてほしいという要望もいただいているので、共通のテーマとして取り組んでいきたいなと思います。あと、公共交通機関の利用、出せばきりがありませんが、挨拶や身だしなみについても、もっと低年齢のときから取り組めるようなことをどんどんおっしゃっていただいて、それらを共通の課題として、保護者としても家庭で取り組めることは取り組んでいきたいと思いました。そういう共通のテーマなどを話し合っていたらいいかと思います。

#### (田尾委員)

今、廣畑委員の後を受け継ぎ、紀南高校の同窓会長になったのですが、同窓会長としましては、紀南高校をずっと存続させたいという気持ちはもちろんあります。しかしながら、一番考えなくてはならないのが、今からの子どもたちの学習環境をいかに整えていくかということだとも思っています。そういった意味で本当に廣畑委員の言葉とかぶるところがありますが、紀南高校だけではなく、この地域が一体となってこの問題を解決していくことが、今とても大事かと思っています。私が10年ほど前に紀南地区PTA連合会の会長をさせていただいたときは、第二次再編活性化ということで、県としては2校を統合するという形ができました。でも、この

紀南地区PTA連合会、教職員組合とか六者懇（三重県教育関係団体懇談会）あたりがみんな情報共有して、なんとか2校存続が大事だということでやってきました。これからも紀南地区PTA連合会あたりが一番中心となって、本当に自分たちの子どもを守っていくという意識でやってもらわないと、紀南高校や、木本高校やと言っていたら、うまくまとまらないところがありますので、紀南地区PTA連合会の皆さんには本当に今から頑張ってもらいたい、汗をかいてほしいです。それをみんなでサポートしていくという体制がすごく大事になってくると思います。一番大事なのは、それまでの間、2校が切磋琢磨し、本当に気持ちよく一緒になれるように頑張っていくのが大事だと思います。

**（大森会長）**

ありがとうございます。田尾委員の言われたことは、去年の協議のまとめのところにも書かせてもらっていますが、「絶えず地域の子どもの教育を地域全体で考えていく」という話ですので、まさに今年度もそういうまとめ方になるんだと感じておりますが、その他、ご意見等はいかがでしょうか。

**（土井委員）**

次年度のテーマとしては、3ページの最後に書かれている前回のまとめの主な意見の中の一つですが、木本・紀南両校の活性化の問題は当たり前ですが、統合するならどのような高校なのかという議論をスタートさせないと、いつだったか塩野委員がご指摘になった、近大附属新宮は中学校からありますから、小学6年生の段階で、私立の中学校へ行くのか、公立の中学校から公立高校へ行くのかというラインの選択を迫られることになります。現状では、高校入学時に両校統合の年度に該当する可能性が高いのは現小学4年生であり、その子どもたちが小学6年生の時点での情報提供という点では、後2年間ぐらいしかないという意識は絶対持っておかないといけないと思います。つまり、2年後にはどのような高校かというビジョンを示さなければならない。1年ではまず結論が出ないと私は思います。高校のビジョンのしっかりしたアウトラインをつくるためには、最低2年はかかると思います。したがって、それは来年度の頭からその話にいよいよ取りかからねばならない。どんなやり方がいいのかよくわかりませんが、分科会にして、もっと細かく話し合いを始めるべきなのかもしれないし、それについては皆様に知恵を絞ってもらおうとして、統合するならどのような高校なのかという議論を始める必要はあるかと思えます。

もう一つの木本・紀南両校の活性化の問題について、先ほど言ったことと重複してしまって申し訳ないですが、木本高校と紀南高校だけでは地域外への進学をとめきれないと思っています。近大附属新宮中学・高校も、高校から来てもらう子どもだけでなく、中学校時点からより多く来てもらえるように考えて取り組んでいくかもしれない。我々は小学校でも、中学校でも、高校でも公立の学校教育関係者として責任があります。私ども木本高校もできることなら小学生やその保護者にも木本高校はこういうプランを描いております、あるいは、来年であれば、こんなことをもう始めましたというふうに話をしたいと思っています。ところが、間の中学校と学力の面等できちんとすり合わせをしておかないと、木本高校だけが小学生の保護者

に話をしても、間の中学校はどうなっているのですか、中高とも一緒の方向ですかということが当然問われるものと思います。その点でもっともっと中高は連携を図らなければならない。今ようやく生徒指導や人権の問題での連携が進みつつありますが、やはり要の学力や授業のところで連携を進めなければ、子どもや保護者にアピールできないとつくづく思います。また、そうでないと、統合の時期が早まってしまう可能性もあると危惧しているところです。

**(大森会長)**

津市の場合は、これから小中一貫教育が段階的に導入されていきます。既に一部では実施されています。そういう観点からいくと、小中一貫教育校はそういうことができることもあるかもしれません。あと、何かございますか。

**(野地本委員)**

少し気になっていたことがあり、話が逸れるかもしれません。尾崎委員が最初に言われたことですが、一所懸命頑張って就職したものの、その後、3ヵ月とか1年以内ぐらいで離職してしまった子どもたちで、地元へ戻ってきて学校の先生に頼ってくるような人はいますか。

**(新谷委員)**

やはりいます。進路指導の担当のところ相談に来る生徒もおりますが、いけません、地元の就職口は紹介できるかもしれませんが、そんなに広くは紹介できない。こういうところがあるぐらいは言えますが。紀南高校も木本高校も同じくかもしれませんが、特に紀南高校の傾向としては、外へなかなか出て行きたがらないというのがあります。なぜかという、「いずれは地元へ帰ってきたい。他地域に就職しても辞めて帰ってきても仕事がないやろ。だから地元で就職するんさ」という子どももいます。ですので、離職率の問題は、確かに学校でも問題にしています。今、インターンシップの中でも生徒たちの職業観をきちんと踏まえながら、卒業後の進路に向けての話をしていく、そういう形の取組をしています。

**(廣畑委員)**

尾崎委員、野地本委員とも学校を卒業してからのフォローの話をされていました。紀南高校では学校進路支援と同窓会が協力しながら激励訪問会という形で、卒業生のフォローに行っています。それは就職者だけではなくて、進学者のところへも行っています。それで、就職先や進学先での様子やそこで馴染めているか等、100点ではないにしろ、そういう形でのフォローを十数年来取り組んでいます。

それから、学校運営協議会では、北越紀州製紙や紀南病院、熊野ロータリークラブ等の企業や地域の有識者の方々の協力を得まして、対話集会という行事を行っています。120名の生徒に対して30数名の講師の方に来ていただいています。対話テーマの中には職業観というものもあります。また、生徒と大人とのコミュニケーションをどう図っていくかという教育の部分もあります。

**(野地本委員)**

どういう事情にしろ、地元へ帰ってきた人がいれば、就職してもらって、できればそのまま地元へ住み着いていただいて、少しでも人口を増やして欲しいと思います。うちも頑張っていきます。

(大森会長)

何かほかにご意見等ございますか。予定の時刻も過ぎましたのでよろしいでしょうか。

(田岡委員)

先ほどから小中高の連携という言葉が出ておりますが、来年度は、小学校の校長会の代表にもこの協議会の委員として入ってもらいたいと思いますので、一つ提案させていただきます。

(大森会長)

田岡委員のご意見はその通りだと思います。

また、これは私の意見になりますが、各団体でもう少しビジョンをまとめてほしいと思います。木本高校や紀南高校はこういう教育をすると提示されましたが、小学校や中学校では、こういう地域の子どもを育てていますと。それらをつなげて小学校ではこういう子どもが育っていきます。中学校ではこういう子どもが育っていきます。では、高校ではこういうふう育てますと。それで、まさに先ほど堀川委員の言われた12年間を見据えた教育の完成となります。ここは高校の活性化を協議する場ですが、皆様のご意見をお伺いしていると、地域として小中高が連携して取り組んでいくという話でまとまってきていますので、その辺を各団体でまとめていただいたほうが、一本、道を通す意味ですり合わせていきやすいのではと考えます。この地域でどういう子どもたちを育てていくのか、それがどういう形になるかわかりませんが、この2つの高校の将来の行方も左右すると思います。来年度は各団体から、どのような子どもが育っていくのがいいのかというご意見をお聞かせいただければと思います。よろしいでしょうか。

それでは、予定の時刻を過ぎてまいりましたので、その他の事項へ進みたいと思いますが、何かございませんか。

(事務局：加藤教育改革推進監)

事務局からは、特にありません。

(大森会長)

それでは、進行を事務局にお返しします。

#### 4 連絡事項

(事務局：加藤教育改革推進監)

大森会長、ここまでの進行をありがとうございます。また、委員の皆様、遅くまで本当にありがとうございます。この1年間、この協議会をベースにしながら、木本高校ではサポート委員会、紀南高校では学校運営協議会と連携を取りながら、一定、両校の特色化・魅力化による活性化について成果を生むことができたかと思っています。本当に地域の皆様のご尽力のお陰とってお礼申し上げて、まず、厚く感謝を申し上げたいと思います。

ただ、両校長からもありましたように、まだまだいろんな課題はたくさんあると考えております。来年度、引き続き、小中高をどのようにつないでいくかということも含め、また、平成31年、32年という将来的なことも視野に入れながら協議

をしていく必要があると考えております。

なお、委員の構成についても、もう一度考える必要がある。また、関係の団体の方と相談させていただいて増員等もさせていただければと思っております。

ここまでの今年1年間、いろんな形でご努力いただけたと思っております。厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

それでは、事務的な連絡を担当からさせていただきます。

**(事務局：西)**

長時間にわたりご協議いただきありがとうございました。

2点、事務上の連絡をさせていただきます。

1点目ですが、委員の中には旅費に関する書類を机上に置かせていただいた方がいらっしゃいます。それを事務局にまだご提出いただけていない委員につきましては、お帰りの前にご提出いただきますようお願いいたします。

2点目ですが、駐車券のことについてです。入口のところに駐車券を無料にする処理の機械を借りておりますので、もしまだその処理がお済みでない方は処理をしていただければと思っております。

以上2点です。それでは、これをもちまして閉会いたします。皆様、お気をつけてお帰りください。どうもありがとうございました。